

星剣神姫

# セイクリッド SACRED CANON カノン

催眠淫辱に堕ちる心と身体

有機企画

挿絵●neropaso

試し読み版

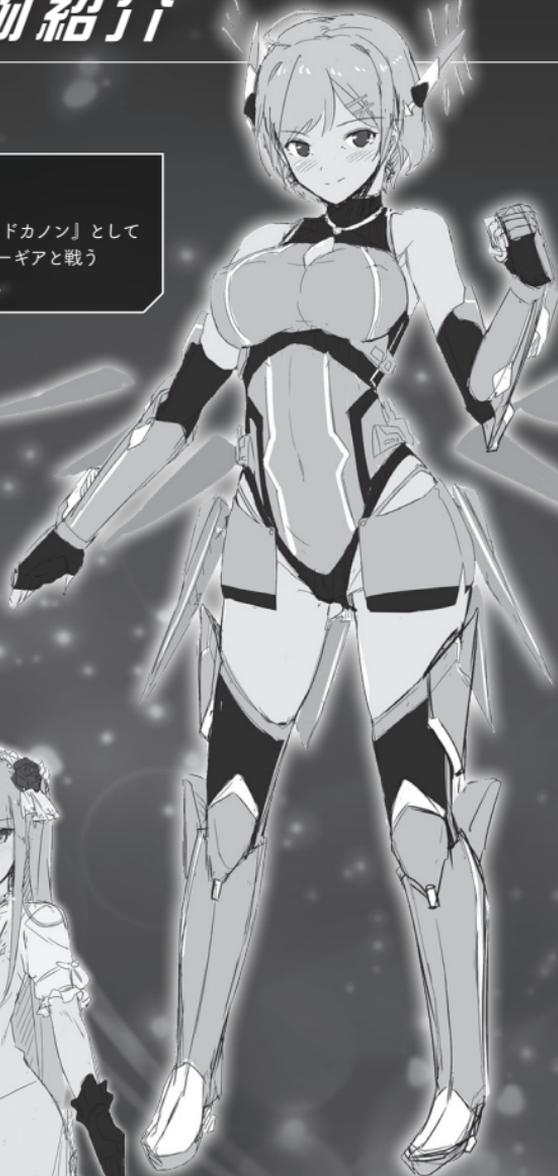
18  
未 満

第一話	悪を斬り裂く大剣	006
第二話	催眠遊戯	047
第三話	響叶音の日常	077
第四話	オナニー応援少女	102
第五話	最愛の人	132
第六話	背徳の市民輪姦	162
第七話	変貌する肉体	191
第八話	熟女神姫・肛虐調教	215
第九話	最終決戦・セイクリッドカノンVSルリアーナ	242
最終話	輝く星剣神姫	274

# 登場人物紹介

ひびき かのん  
**響 叶音**

『星剣神姫セイクリッドカノン』として  
侵略星団プラネタリーギアと戦う  
正義の変身ヒロイン。



ゆうせい  
**遊星のルリアーナ**

侵略星団プラネタリーギアの女幹部。  
催眠で叶音を追い詰める。

## 第一話 悪を斬り裂く大剣

「ヒイツ!? き、キヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

「叫ぶヒマがあつたら走れ! 早く逃げろ!」

白昼のオフィス街は混沌に包まれた。信号を待つ車、新緑をそよがせる街路樹、ランチを食べようと歩く人々、そのすべてを蹂躪するべく異形の拳が振るわれる。

「ガーン! ガガガーン! ブッコワース!」

人類など取るに足らない存在だと知らしめるように、我が物顔で車体を踏みつけ進むのは岩石の巨人だ。

体長はゆうに八メートルを超え手足は丸太を束ねたよう。一步踏み出すだけで地響きが起こり、アスファルトがクッキーのように砕かれる。

「オレサマハ怪人ロツクギア! 恐怖! ニンゲンドモ恐怖シロオ! ハツハツハアッ!」

ロツクギアと名乗る怪人は力任せに剛腕を振るい破壊活動を行う。大型トラックを一撃でスクラップにし、蜘蛛の巣のように巻き取られた電線が火花を散らした。

「おい、警察はまだ来ないのか!？」

「来たってあんなデカブツ相手じゃなにもできないだろ。それよりあの子だ! 早く倒してくれないと俺の新車がオシヤカになっちまう!」

「ママー、カノンちゃんまだなのー?」

「心配しないで。きつともうすぐ来てくれるわ」

人々は逃げ惑い絶望に顔を青ざめさせる。

怪人とは地球外から現れた脅威、『侵略星団プラネタリーギア』の先兵だ。しゃべり方こそコミカルだがその力は圧倒的。

ダークエナジーという未知のエネルギーで動く肉体は特殊なバリアに守られ、戦車砲の直撃程度ではビクともしない。

「カノン……アノ忌々シイ、小娘カ! アイツハ絶対ニ許サン。オオオオオーツ! グチヤグチヤニシテヤルウウウー!」

ロックギアの顔面に青筋を思わせる隆起が浮かぶ。感情に任せてスイングした拳はビルの壁面を大きくえぐり取った。

逃げ惑う群衆は皆同じことを考え、不条理を打ち破る唯一の存在を待ち望んだ。

「ハヤクコイ! コナイト、ニンゲンガ死ヌゾオツ! ガハハハハ!」





頭には生体感知のデバイス、耳には星を模ったピアス、腰の周りには飛行ユニットの『エナジーウイング』を展開している。

手足にはピンクのロンググローブとロングブーツを装着し、アクアブルーの双眸そうぼうは曇り一つなく澄み切っている。

そして瓦礫を吹き飛ばした大剣『フリーユゲル』、小柄な身体には不釣り合いな武器の切っ先を敵に向け、人々の恐怖を打ち消すように少女は名乗りを上げた。

「胸の勇気を光に変えて、正義の剣が悪を断つ！ 星剣神姫せいけんしんきセイクリッドカノン、みんなに代わってただいま参上！」

「うおおおおおっ！ セイクリッドカノンだ！」

「カノンちゃんきたー！」

「よっしゃやっちゃまえ！ ブツ飛ばしてやれ！」

割れるような歓声を受けカノンは真っ直ぐに敵を見据える。その眼差しは、これ以上の暴虐は許さないと宣言するかのようだ。

「キタナ小娘！ 今日こそ、スターエナジーヲ奪ッテヤル！」

スターエナジーとは星剣神姫の力の源だ。そのパワーは怪人のダークエナジーを遥かに上回る。ロックギアの無差別攻撃は星剣神姫を誘い出すためだったのだ。

「やってみれば？ 無抵抗な相手にはしゃいであるアンタにできるならね」

「バカニスルナ！ 許サナイゾ！」

「許さないはこっちのセリフよ。ギッタギタにしてあげるわ！」

「ブツ殺ス！ グゴオオオオオオオオオッ！」

ロックギアはカノンを狙い、ボウリング球を投球するような動きで、岩石拳を振りぬいた。アスファルトがガリゴリと削れ土煙が巻き上がる。

直撃すれば真つ赤なシミになるしかない必殺の一撃。だが、拳が通り過ぎた跡に少女の姿はなかった。

「おっそ。遅すぎてびっくりするんだけど」

「ナ、ナニイツ!? ガッ、グウウウ……ッ！」

間拔けな声を出し驚愕きょうがくに目を見開く。カノンは怪人の拳にフリーユージェルを突き立て、悠々とロックギアを見下ろしていた。

拳に幾筋もヒビが走り崩れ落ちていくが、少女のしなやかに引き締まった肢体にはかすり傷一つない。

「痛い？ これがアンタがみんなにやったことよ」

「ウルサイ！ 説教スルナアアアアアアアアアッ！」

冷たい視線を投げかける星剣神姫。お前に傷つけられた人々の痛みはこんなものではないと示すかのようだ。

ロックギアは瞳を血走らせ残った手でカノン握り潰そうと五指を広げる。しかし、その反撃は想定範囲内。

「そうくると思ってたわよ！」

「アギッ!? ゴアアアアアアアアアアアッ!?」

カノンは華麗に身を翻すとフリーゲルを引き抜き、風のごとくエナジーウイングを輝かせて天空を駆けた。滑空に合わせて大剣が滑り、竹を割るように巨腕が切り裂かれていく。

拳まで刃が到達すると大剣を振りぬき、カノンは手近なビルの上に着地した。スーツを盛り上げる双乳がプルンツと弾む。

「自分がなにをしたかわかった？ 反省して二度と人を傷つけないって誓うなら見逃してあげるわよ」

「ガギギ……ニンゲンナド家畜ダロ！ 調子ニ乗ルナ、クソ小娘ガア！」

「そう。じゃあこれで終わりにしてあげる。フリーゲル、モード・タイタン！」  
砕けた拳で怒り任せに攻撃するロックギア。カノンは跳躍し敵の頭上を取ると、フリー

ーゲルを上段に掲げスターエナジーを刀身に込めた。

エメラルドグリーンの光が輝き、瞬く間にフリーユージェルが巨大化していく。長さ十メートル、ロックギアの身長を超えるまでに成長すると、重力に従って大剣が振り下ろされる。

「必殺！ エクサランス・クレーター！」

「ゴアッ?! ガッ、ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

斬撃はロックギアを左右に両断し、地面を大きく陥没させる。生命機能が停止し体内のダークエナジーが暴走を始めた。

黒い光の筋が四方八方に伸びていく。

「オノレ星剣神姫メ……。プラネタリーギアニ、栄光アレ!!」

忠誠を遺言にロックギアは絶命した。岩石の肉体が崩壊し、光と共に黄土色の体液がブシャアアアとまき散らされる。

「ちよつと、マジでっ?! うわ、口に入った！ ペッペッ！」

至近距離にいたカノンはモロに体液を浴びてしまう。甘ったるい香りのするドロドロがショートヘアやレオタードスーツを汚し、顔にかかる。

怪人との戦いが終わったことで、避難していた人々が歓声と共にカノンのもとへ駆け寄っていく。

「カノンちゃんありがとー！　ちょーカッコ良かったよ！」

「おかげで娘の誕生日に間に合いそうだ。ありがとな」

「あ、あの一緒に写真とサインを……」

「待つて待つて写真はナシ！　今メイク落ちてるから！　サインは……はい、これでいい？」

人々の歓声に応えカノンは手を振る。この笑顔を守れて良かったと心の底から思う。

「やばっ、そろそろ時間ね。みんな後片付けはよろしく！」

スターエナジーが残り少なくなり胸元の宝石が点滅する。カノンは大きくジャンプするとビルを飛び越し帰還した。

星剣神姫の活躍によって本日も街の平和は守られたのだった。



「ただいまー」

マンションのドアを開き、ブレザー制服を着た少女が帰宅した。ショートヘアの茶髪と浅く日焼けした肌が活動的な印象を与える。

彼女こそ先程の大立ち回りの主役にして星剣神姫セイクリッドカノンの正体。響叶音、ひびまかのん侵略者と戦う正義の変身ヒロインである。

「おかえりなさい叶音ちゃん。あら、その足どうしたの？」

「これ？ 体育の時間に擦りむいただけ。すぐに治るでしょ」

母親の響琴音ことねが出迎え、心配そうに声をかける。膝小僧の皮が剥けてわずかに血にじが滲んでいた。

「もう、ちゃんと手当てしないと跡が残っちゃうわよ。今、救急箱持ってくるわね」

「はい。ママ」

小走りでリビングに戻る姿を叶音は見送る。さすがに下校中に怪人に遭遇し命のやり取りをしてきたとは言えなかった。

箱入り娘でお姫様のように育てられてきた母親がそんなことを知れば、驚きのあまり気絶してしまうだろう。

傷口を消毒して絆創膏を貼ってもらおうと叶音は自室に戻った。勉強机にベッド、流行りの男性アイドルのポスター、桜色のカーテン、いつもの光景だ。

「つかーれーたー。もう動けないー」

安堵と共にどっと疲労が押し寄せ、ブレザー制服を脱ぎ捨ててベッドにダイブする。枕

に顔を埋め、ふーつと息を吐いた。

超人的な力を持つ星剣神姫といえど中身は年頃の少女。命懸けの戦いは何度やっても慣れるものではない。

（わたしが地球の平和を守る星剣神姫か。事實は小説よりなんとかってやつよね）

胸元にある八芒星の痣<sup>あざ</sup>、変身中は宝石があつた部分を指で撫でる。すると刺激に反応するように淡いエメラルドグリーン<sup>エメラルドグリーン</sup>の光が叶音を照らした。

スターエナジーの源『スタージェム』、星剣神姫の心臓とも言える器官は叶音の身体と密接に結びついていた。

（初めて変身して幹部っていう強い怪人とも戦って……色々あつたな）

瞳を閉じて叶音は今日までのことを思い出していた。自身が星剣神姫に選ばれた日のことを。

二か月前。宇宙より現れた招かざる客、侵略星団プラネタリーギアが地球侵略を開始した。目的は全人類を自分たちの奴隷として従え地球を支配すること。技術力の差を見せつけるように地球の生物や鉱物、機械などをモチーフにした怪人が出現、世界各国へ逐次投

入され、いくつもの街が蹂躪された。

怪人の圧倒的な力、ダークエナジーという未知のエネルギーに為す術のない人間たちだったが、地球の意思は人類を見捨ててはいなかった。

夜空に無数の星が流れた日。スタージエムをその身に宿した少女たち、星剣神姫が誕生したのだ。

(アルテミシア様すつごく美人だったな。また会えるといいんだけど)

どこまでも続く白い砂浜と天使のように羽の生えた女性。夢の中で見た光景をカノンは思い出していた。

【カノン、あなたには使命があります】

【使命……？ どういうこと？】

アルテミシアと名乗った彼女は、地球の意思によって生まれ、あらゆる生命を守る女神であり、戦士を求めていると語った。

その求めに応じ、叶音は星剣神姫セイクリッドカノンとなったのである。

(外国で他の子たちも戦ってるんだよね。一人じゃないってなんかいいな)

世界各国で叶音のような星剣神姫と怪人の戦いは続いている。プラネタリーギアも当初の目的を棚上げし星剣神姫の撃破、彼らのテクノロジーをもつてしても生成できないスタ

ージェムの回収を目標にしているところがあつた。

叶音の住む街を中心に怪人が発生しているのはそのためだ。

(どっからでもかかってくるきなさい怪人！ みんなの平和は響叶音が守る！ なんてね。なんて……)

まぶたが重くなつていく。

心地よい眠気を覚え、少女の意識はまどろみに落ちていった。



翌朝、叶音の通う私立<sup>せいしん</sup>星辰学園。

ホームルームの開始を待つ教室は昨日の話題で持ち切りであつた。星剣神姫とロックギアの戦いについて、どの生徒も話している。

「俺あの場所にいたんだよね。強いし可愛いしカッコイイし、やっぱり間近で見るカノンちゃんはやんばサイコーだよ」

「もうザコじゃ相手にならないよな。初めて登場した時はしょぼいネズミ怪人に苦戦していた大丈夫かコイツって思ったけど」

「プラネタリーギアも案外大したことないよな。この間倒したフロストなんて幹部とか名乗ってたワりに瞬殺だったし」

男子生徒たちが好き勝手に感想を言い合っている。叶音は机に肘をつきジト目でその様子を眺めていた。

「瞬殺ってフリーユゲルは凍って使えなくなるし相手はメチャクチャ早いし、カウンターパンチで勝ったの初めてなんですけど」

「叶音さん、どうしたんですか？」

「ううん。七海ななみなんでもない」

星剣神姫の戦いは時に速さを増し、一般人には決着しか見えないこともある。フロストは血命けつめいれいど零度という本体が絶命しない限り溶けない氷を使う強敵だった。

叶音は外野の適当な物言いにイラっとしながらも前の席に座る友達、伊吹いぶき七海との会話に戻った。

(ま、いいけどね。有名税ってことで)

星剣神姫になってからこういった光景は日常茶飯事だ。

応援されるのは嬉しいが毎日クラスメイトの話題に上げられるのは落ち着かない。

「なんだかお疲れみたいですわね。あつ、もしかしてまたあの方たちがなにか？」

「あー、違う違う。あんなヤツら喧嘩するレベルに達してないから」

元々正義感の強い叶音はよく不良たちと衝突を起こしていた。カツアゲの現場を見てしまうと放っておけず、十人相手に大立ち回りを演じたこともあるほどだ。

他の生徒たちも巻き込んでほぼ互角だったパワーバランスも、星剣神姫に選ばれたことでカノンが圧勝するようになり、学園で不屈きな行為を働く輩は少なくなつた。

「ごめん気を遣わせて。部活の大会が近いからお疲れモードかも」

「ならいいんですけど……叶音さんは頑張りすぎるところがありますから心配です」

あはは、と笑って叶音は誤魔化す。友達に嘘をつくのは心苦しいが、星剣神姫の正体は絶対に秘密だ。

もし特定されでもしたら無関係な人々まで巻き込んでしまう。

(いつかすべての戦いが終わったら話したいわね)

「悩みがあったらいつでも相談してくださいね。例えば星・剣・神・姫の活動が忙しいとか」

「うん。って、七海？」

背筋を唾液たっぷりの舌で舐められるような感覚。おぞましい違和感を覚え叶音は目を見開いた。

七海の姿が陽炎のように歪み、教室の風景がガラリと変わった。先程まで生徒たちがひ

しめいていた校舎は、薄暗いピンク色の照明にミラーボール、部屋を中心にダブルベッドが鎮座するラブホテルに。そして七海は――。

「はじめましてカノン。会えて嬉しいわ」

真っ赤な絨毯の上に立っているのは銀色の長髪を腰まで伸ばし、優雅な微笑を浮かべる少女。スウィート・ロリータ、甘ロりとも呼ばれる純白のジャンパースカートに身を包み、ヘッドセットを頭に着けている。

アンティークドールのように整った容貌は可憐ではあるが、氷のような冷たさを感じずにはいられない。彼女が人間とはまったく別種な存在なのだと。

「ど、どうなってるわけ!? 七海はみんなはどこ!!」

「私はプラネタリーギア六将星の一人、遊星のルリアーナ。ずいぶんと怪人たちを倒してくれたようね」

「――ッ!! スタージェム・コネクト!」

声に応えるように胸元の八芒星が輝き、まばゆい閃光が周囲を真昼のように照らした。少女の身体が人から神姫へと昇華されていく。

制服が光の粒子となって分解されると一糸まとわぬ裸体が露わになる。素肌が外気に触れ少女は「んんっ」と艶っぽい声を上げた。

ゴム毬の弾力とマシユマロの柔らかさを兼ね備えたおっぱいが弾み、同級生より少し大きなヒップがフルリと震える。スターエナジーが充填されると全身の感覚が鋭敏になり、圧倒的な力が湧き上がってくる。

最後にピンクと黒を基調としたレオタードスーツ、ミニスカート、ロンググローブとブーツを着装し、フリーユージェルを構えて星剣神姫は幹部に挑む。

「へえ、こんな風に変身するの。見るのは初めてだわ」

「……どうしてわたしの正体を知ってるわけ？」

カノンは目の前の少女を睨みつけながら内心で冷や汗をかく。相手の能力もわからないまま怪しい空間に拉致されてしまった。

それに親しい人を巻き込まないためにも自分が星剣神姫であることは秘密にしている。正体がバレたということはあらゆる最悪を想定しなければならぬ。

「凍星のフロストは一对一の戦いにこだわっていたみたいだけど私は気にしないわ。スタージェムを奪えるなら、ねっ」

(笑っちゃうくらいピンチだけどやるしかないわね。相手がだれだってわたしは負けない！)

実力は紙一重で倒した幹部と同格かそれ以上だろうか。

星剣神姫の力の源を狙う敵。カノンはルリアーナから目を離さずフリーユージェルの柄を握りしめ、スターエナジーを込める。

クラスメイトを守るためにも退くわけにはいかない。この場所が相手のホームグラウンドだったとしても。

「やる気満々って感じね。でもやめておきなさい。だって無駄なもの」

「——ッ!? か、身体の力が……!?!」

ルリアーナと目が合っただけでカノンはその場に頽くずおれてしまった。身体がクラゲになってしまったかのように手足に力が入らず立ってられない。

フリーユージェルが手のひらから滑り落ちて絨毯に沈んだ。

「なんで……クソッ、動いてよ!」

「昨日ロックギアの体液を浴びたでしょう? あれにスターエナジーの力を減少させる薬を混ぜておいたの。私の好きなタイミングで発動できるようにね」

「っ……なんですって!?!」

「大丈夫、痛みは一瞬。スタージェムを取り出したらそのまま心臓も貰ってあげるわ♥」

青ざめる星剣神姫を見下ろしルリアーナは薄く笑って顔を近づけた。上品なレースの手袋で彩られた指先が歪み、猛禽類の爪のごとく鋭さを増す。

これなら少女の肉など簡単にえぐり取れるだろう。

「命乞いはしないのかしら？　こうなったのも全部アルテミシアのせい。頼んでもないのに無理やり星剣神姫に選ばれただけ。勝手に地球の命運を背負わせられるなんて大迷惑。理由はいくらでもあるわよね」

「……………」

「ねえカノン、人類を裏切って私たちの仲間になってもいいのよ？　そういう展開も嫌いじゃないわ♥」

「舐めないで。どんな結末になったって絶対後悔なんてしない。全部わたしが選んだことだから」

「もつと泣きわめいてくれた方が私好みなのだけど、まあいいわ。セイクリッドカノンもこれでお終いいね」

ルリアーナの指が胸元に迫る。カノンはギュッとまぶたを閉じ、その瞬間を覚悟した。いつか他の星剣神姫が目の前の少女を倒してくれると信じて。

そして――

「ッ！　なるほど。そういうことね」

「え、これって……………」

どれだけ待っても鋭い爪が柔肌を切り裂くことはなかった。スタージェムが発光しエメラルドグリーンのバリアが爪を阻んだのだ。

「スタージェムを守るための防御機構。アルテミシアの加護ということかしら。私の薬も効かないなんて驚いたわ」

「ぎ、ざまあみなさい！ そうそうアンタの思い通りにはいかないってことね！」

恐怖を押し殺しカノンは精一杯の虚勢を張る。依然としてピンチであることは変わりないがひとまず命の危機からは脱出できた。

「解析した感じだと攻撃に対して自動で反応するみたいね。本人が動けない分、大半のスターエナジーを防御に回してる感じかしら」

ルリアーナはバリアの表面を爪でなぞる。スターエナジーが少しずつ爪を崩壊させていくが痛みは感じていないようだ。

自分の肉体をモノとしか思っていない態度に叶音は胸騒ぎを覚えた。

「ふうん、ずいぶんと頑丈なバリアね。私の艦ふねの設備でも突破するのは難しいかしら」  
構造を解析しているのか電子音がルリアーナの瞳から聞こえてくる。外見は人間の少女と変わらないが、異星の生き物だということを理解させられる。

「あきらめたら？ 正々堂々と勝負するなら受けて立つわよ」

「力づくは無理のようね。では、こうしようかしら」

ルリアーナは爪を元に戻すとカノンのレオタードスーツ、その胸部に触れた。むにゅりと肉球が手のひらを押し返す。

「な、なにしてるの!？」

「スタージェムは正義の心を持った人間にしか使えない。抽象的な話だけどプラネタリーギアの調査ではそうなっているの。だから快楽で蕩かしてあげるわ♥ 正義なんかよりセックス優先♥ 恥ずかしいことが大好きな肉奴隷相手には加護も消えてしまうんじゃないかしら♥」

「やめて! わたしに触るな!」

想像よりも遙かに最悪の展開に声を荒らげるカノン。操り人形のように女の子座りの姿勢を取らされ、胸部を大きく突き出した。

ルリアーナのまとう空気が戦闘から淫戯へと湿ったものに変わる。指が谷間をなぞるとレオタードスーツで強調された双乳がいやらしく揺れた。

(にくどれいって……え、エッチなことよね。なに言ってるのよコイツ!)

迫りくる性調教の気配に動揺が隠せない。額に汗の玉が浮かぶ。

「近くで見ると本当に大きいわね。もしかして怪人を誘うためかしら?」

「う、うるさいわね！ アンタには関係ないでしょ！」

九十一センチのFカップの美巨乳、ロケット型の肉穂をまじまじと見つめられ、カノンの頬がカアツと赤くなる。

母や同性の友達ならいざ知らず、プラネタリーギアに肌を弄られるのは初めての経験だ。身体さえ自由ならフリーゲルで叩き切っているところである。

「男じゃあるまいし、こんなこととして楽しいわけ？」

「異性だけが性的興奮を覚えると思っているのね。ふふ、可愛いわよカノン。大丈夫、肩の力を抜いて私に身体を預けなさい」

「ふざけんな！ だれがアンタなんか……っ、ひゃうううううん!!」

鎖骨から乳首の先端を指先がなぞると、カノンは子猫のような悲鳴を上げた。二重まぶたが大きく開かれプツプツと鳥肌が立ち、気持ちの悪いパルスが背筋を伝う。

自分で触るのはまったく違う感触に戸惑うばかりだ。

「軽く触れただけなのにずいぶん敏感なのね。可愛い声♥」

「ちよつとびっくりしただけよ。なんてことないわ」

「まだ準備運動にも入っていないんだからしつかりなさい。私を失望させないでね」

「やっ、待って！ そこは……ン、んくうううう……!!」

「うるさいわね……はう♥ うううう……♥」

排泄快美によって言い返す気力も雲散霧消する。パツクリと開いたアナルの奥ではピンク色の壁が蠢いていた。

前の雌穴も愛液に濡れ、尿液と混じっていやらしい香りを醸し出す。

「では次にいきましようか。まだ一個目が出ただけだもの」

「一個目って……そういえば何個入れたわけ？」

「八個だけど？ 今四分二十秒経過したから残り時間で七個頑張つてね♥」

カノンの顔を覗き込み、絶対零度を思わせる笑みを浮かべるルリアーナ。底の見えない絶望が美少女神姫の心を支配していく。

一個排泄するだけでも気が狂いそうな快感が押し寄せてきたのに、連続で七個も生み落とせるわけがない。

このままでは辱悦に溺れ、早くもアルテミシアの加護を失ってしまいそうだ。

(どんなに気持ち良かったって快楽になんて負けない！ だってわたしはみんなのために戦う星剣神姫なんだからあ♥)

瞳を淫欲で蕩かせ、カノンは再び下半身に力を込める。括約筋は円形にパツクリと開いたまま、一度目よりもスムーズに卵を運んだ。

出口から直腸壁の中までミッチリと快美球体が詰まる。

「全部……出すっ！ あぐ、ふんぐううううう……ぶヴウウウウウ！」

「がんばりなさい変態ヒロインさん。産卵するの気持ちいいでちゅかく？♥」

「ううくああ……♥ こんなの気持ちいいに決まってるでしょ♥ あぐ♥ ひぐつう♥  
ケツ穴開くのクセになるううう……♥」

星剣神姫を語っていた唇から紡がれるのは、下品極まりない屈服の言葉。行動改変の暗示が侵攻しているのか、ルリアーナの予言通りはしたなさを曝け出してしまおう。

形の良いヒップは汗をベツトリとかき、リンゴのように紅潮していった。

「あつぐうううう♥ だすの好き♥ たまんない♥ はあ、ああああ♥ ほ、ホントに最低よ♥ 最低♥」

Fカップ美巨乳は痛いほどに乳首を屹立させ、卑猥な野苺がレオタードスーツの上からでもはつきりとわかった。

得体の知れない衝動に突き動かされカノンは肛華を咲かせる。

（全部一気に出さないとお♥ 早く♥ 早く♥）

時間に追われるカノンは懸命にいきむ。だが、無情にも終わりの時間が訪れた。

「残念だけどここでタイムアップ♥ みーんな孵化しちゃうわね♥」



腸液をしぶかせ、かぐわしい芳香が部屋に広がる。

そして、プライドを濁流で押し流すような絶頂が訪れた。

プリユ♥♥ プリユリユ♥♥ ブツ、ブブ♥♥ プボン♥♥ ブボボ、プポポポポポ♥♥

「イク♥♥ イクう♥♥ ケツ穴くりゆうううううう♥♥ 出産♥♥ 出産♥♥ お尻で産むのたまんないいい♥♥ みつともない音させながら何回もイひゅ♥♥ ママになっちゃう♥♥ お、アナル擦られるのきもちイイイイイイ〜ツ♥♥」

排泄音を盛大に鳴らしカノンは初めてのアナルアクメを決める。七体のリキッドワームが連続して吐き出され腸液と共にシートを汚す。

白目を剥き口元からよだれを垂らす姿に、人々の希望を背負う星剣神姫の面影はない。ベッドの上にいるのは、浅ましく快楽を求める一匹の肛門マゾだ。

「あぐ、ううう……全部出たあ♥♥」

すべてを出し切った少女は恍惚の表情で忘我に浸る。ドーナツのように丸い円を描く肛華は、ポピポピと濁った音色を断続的に鳴らす。

トイレで排泄する時とは比べ物にならない満足感、産みの悦びに頬が緩み甘い吐息がこぼれてしまう。

「うわ、すっごい匂い♥♥ それと茶色のゴミがついてる子がいるんだけど、これは言及し

ない方がいいかしら♥

「うるひゃい♥ りゃ、りゃまれえ……♥」

呂律が怪しくまともに言い返すことも難しい。思考にピンクの靄がかかり、次にどう行動すればいいのかもわからない。

「もうすっかり快樂の虜ね。それじゃスタージエムを——」

勝利を確信し胸に光る寶石に手を伸ばすルリアーナ。彼女はそこで気づいた。エメラルドグリーンの輝きにわずかな曇りもないことを。

（驚きね。この程度の調教じゃ意味がないってことかしら。んー、責める方向を変えた方がいいかもしれないわね）

加護を破るにはまだ時間がかかると知り、もっと効果的に星剣神姫を辱められるように陵辱者は作戦を変更する。

「今日のところはこれで撤退してあげる。また会いましょうカノン。次はもっと面白い見世物を期待しているわ♥」

「え、ン……んんうっ！」

アサガオの花を鼻腔に近づけられるとカノンの意識は明るい光に導かれ、眠りから目覚めるように覚醒した。





「待つてまだ動かないで！ お腹裂けちゃうから……ふグ、ああ……ひぐううううううう〜っ♥ こ、これ激しい……やあ、アアアアアアア〜〜〜ッ♥」

肉欲に昂る雄馬は一度腰を引いてタメをつくと、マシンガンのごとき勢いでピストン運動を開始した。

大きく開いた肉傘が膣壁を擦り理性をゴリゴリと削り取ってくる。声を出すまいと閉じた唇が強制的に開かされ、一突きごとにせつない嬌声を引きずり出された。

自慰とは比べ物にならない生挿入の激しさに、目の前が乱発光する。

「も、もつとスピードを緩めて……あガ、いぎいつ！♥ 奥当たってる……っ！♥ あづクウウウウウウ〜〜ッ♥」

「ヒヒン！ ヒヒヒン！」

「おかしくなっっちゃうからあ♥ おっ、ほおお、エおおオオオオオ〜〜ッ♥ アソコキツいいいい……っ！♥」

キュウキュウとチンポを締め付けながらも窮屈さを感じさせない膣穴は極上の一言。

圧倒的な淫悦を前にした雄馬はがむしゃらに腰を振る。別の生き物のように蠢く肉壁と、抽送にリズムを合わせる腰の上下運動が射精衝動を高めていく。

「へお♥ ああああう♥ おチンポすごいよお……♥」

フェラやアナル、自慰でしかアクメを味わっていなかった肉体は無意識の内に男根を求め、はしたない肉奉仕で悦んでしまう。

性欲が凶悪なまでに昂り、淫らなカノン自身も腰を振ることで水音が大きさを増している。

「ぐう、クツ、ひいいいっ！ ああん……感じちやう♡ シゲルのおチンポ太くて長くて最高なおおとおお♡」

感度改変が雌穴の快美を何百倍にも引き上げ、ペニスを打ち付けられるたびにまぶたの裏で白雷が閃く。

バックから乱暴に犯されていると、自分の非力さを嫌というほど思い知らされた。この身体は雄を悦ばせるためのものだしつと躡けられるようだ。

「はづ、おうおううう！ そ、そこ弱いのお……入口コリコリしないでええええええ♡  
あづ♡ オへああああああ♡」

膣奥まで容易に達する巨肉棒が減速することのない連続ピストンを打ち込む。速さの中的確に感じるポイントを責められカノンの嬌声がハチミツのように甘ったるさを増す。

土埃で汚れたレオタードスーツは汗に濡れ、じつとりと湿り気を帯びていた。

「ヒン、ブルルル！」

「ううう、はあはあはあ……♡ シゲルすつごく上手ね♡ おっほ♡ あへううううう……♡」

淫らな声が止まらない。馬の鳴き声が甘い囁きに聞こえ自分が愛されていることを実感してしまふ。

「え、そうなの？ シゲルもわたしと同じなんだ♡ んん……あなたの初めてになれて嬉しい♡ も♡ ううう、グックううううううううううーッ♡ オマンコ擦れる♡ ゴリゴリくるうううう〜♡」

カノンにとっては恋人と互いの愛を確かめ合うためのセックス。実際の相手が馬だったとしてもせつない感情が子宮を悦ばせる。

蜜壺からはとめどなく欲情の汁が溢れ、絶頂の瞬間が刻一刻と迫ってくる。

（セックスってこんなに気持ち良かったんだ♡ イキたい♡ シゲルのおチンポで雌に躡けらりたい♡）

自分がどれだけ変態的な発想をしているのかも気づかずに、カノンはバックで激しく貫かれ続ける。

カリ首が膣肉を擦り愛液が卑猥な水音を立てるほどに獣姦悦楽へと堕ちていく。

「もう頭トブ♡ デカおチンポ気持ち良すぎちゃう♡ わたしの頭の中おチンポのことし





ンコもしゅごい♥ 頭バカになるううううう♥

「はは、すごい声だな」

「感じまくりだねえ。カノンちゃん」

「もっ♥ ヘオオオオオオ♥ お腹の中ゴリゴリされるの好きい♥ ダブルおチンポクセ

になっちゃううううう♥」

痴女としか言いようのない下品声を上げ、貪欲に快楽を求めようと自らも腰を振る。膣壁も直腸壁もキツく締まり男根を悦ばせた。

Fカップバストの頂点が痠り、男たちの視線を釘付けにする。

(感じたい♥ もっともつと気持ち良くなりたい♥)

「アンタたち、わたしを罵倒しなさい♥ 人前でセックスする変態女だって蔑んでほしい

の♥ あう……♥ んあああ♥」

マゾヒズムに目覚めた心が倒錯した悦楽に突き進んでいく。いつも守っていた人々に失望され、凍えるような視線を向けられたい。

チンポの応援をした時のように、馬鹿にしてほしいと思ってしまう。

「いいのかよそんなこと言って」

「カノンちゃん怒ったりしないかい？」

「気にしなくていいわ♥ その方がザーメンエナジーもたくさん補給できるから♥ ンン……うくああああ♥ それに星剣神姫をいじめながらセックスするチャンスなんて滅多にないわよ♥ ほら、男を見せなさい♥」

怪人を挑発するように不敵な笑みを浮かべるマゾヒロイン。より惨めにみつともなくなる期待にクリトリスもフル勃起だ。

脊髓を快美の稲妻が幾度も走り抜ける。

「そうかい。じゃあいくぜ淫乱女！」

「カノンはいけない子だねえ。おじさんがお仕置きしてあげるよ」

「ほっお♥ おお♥ きたあ♥ 淫乱カノンのケツマンコにデカおチンポ押し込まれてる

♥ おじさんのねつとりピストンでオマンコかき回されてる♥ もっ♥ ほオオオオオオ

オ〜ン♥」

S字結腸に届くほどの勢いで極太肉竿が突き上げられる。大きく張り出たエラに粘膜を擦られると目の前で星が瞬いた。

膣穴にフィットした年配肉竿は、老獺ろうかいなテクニクで感じる部分を的確に責め立てる。スローな抽送に快美神経が焦れ、獣のように発情してしまう。

今が戦闘中だということも忘れ、ルリアーナの存在も目に入らない。

「いつもでっけえケツ丸出して誘惑しやがって俺たちを誘ってたんだろ？」

「そうなの♥ わたしはエロアピールしながら犯される妄想してる変態神姫♥ はう……」

つ♥ 戦ってる時もおチンポのことばかり考えている淫売なんだから♥

「そんなことだろうと思っただぜ。ケツチンポで喜んでるくらいだからな！」

「へお♥ あふううううううう♥ だつてアナルほじられるの気持ちいいんだもん♥ お

トイレしてるみたいでキュンキュンしちゃうんだから♥ んひぐつ、ああ♥ お尻捲れる  
うううううううううう♥

火口のように菊門を盛り上げ口をすぼめて卑猥に叫ぶ。皺を一本残らず伸ばし切り、剛直の昂りに吞まれていく。

性器ではない器官で感じる恥ずかしさに汗が止まらない。ギャラリーの存在も手伝って感度改変の影響を必要以上に感じてしまう。

「よく締まるいいオマンコだねえ。初体験はいつなのかな？」

「つい最近よ♥ 彼氏と学園でしたわ♥ オウ、ふうううう……♥」

「彼氏とはどんな体位でやったんだい？」

「バックでゴンゴン突かれたの♥ 四つん這いで動物みたいに犯されてえ♥ ほっ♥ ウ

ウ♥ 動物みたいにイッチャったわ♥ ああ……♥ 初めは痛かったけどすぐに気持ち良

くなっちゃった♥」

大勢の前でセックスの内容まで告白してしまうマゾ神姫。向日葵ひまわりのように煌めく容貌を羞恥で染め膣粘膜を擦られる。

愛液とカウパーが混じり合いエロティックな香りを振りまいた。

「ケツ穴も締めとけよ。ほら情けねえ音が漏れてるぜ正義のヒロイン様」

「いや聴かないで♥ オナラしてるみたいで恥ずかしいんだから♥ あう♥ へうううう♥ 空気入ってくる……っ♥」

ピストンと共に腸内の空気がかき回され放屁したような音が漏れ出る。プウプウ、ブビと卑猥な音色が奏でられるたびにカノンは頬をさらに赤くした。

女性として一番聞かれたくない音に言及され、羞恥でどうにかなってしまいそうだ。

「じゃあ彼氏のチンポとおじさんのチンポどっちが好きかな？」

「んっグウウウウウ♥ いじわるしないでよ♥ そんなのどっちも好きに決まってるじゃない♥ 彼の超デカおチンポもおじさんのテクニクおチンポも両方がいいの♥ 二本ともオマンコに響いちゃうううううっ♥」

女性器全体で肉竿を締め付け双臀を震わせる。抱えられているせいで体重がかかり、深いところまで怒張を迎え入れてしまう。

子宮口をコンコンとノックされると肉体が融解してしまいそうだ。

(もう無理イ♥ イク♥ イツチャウ♥ ザーメンエナジー補給しながらアクメしちゃうよお♥)

口元からよだれを垂らしカノンは絶頂に向かい突き進んでいく。二重に打ち込まれる快美の戦槌に意識はトブ寸前だ。

呼吸は乱れ視点が定まらない。

「いくぞ。アクメしろ淫乱ヒロインが！」

「イッチャいなよカノンちゃん。みんなの前でさあ」

「んフウウウウ……♥ いっぱいザーメン注ぎなさいよ♥ 周りで見ているアンタたちもブツかけなさい♥」

射精が近づき前と後ろの男はピストンのペースを速める。ギャラリーの男たちも肉竿を扱き、己の欲望を解き放とうと必死だ。

カノンも痛いほどに二つの雌穴を引き締めザーメンを懇願する。恥蜜が洪水を起こし総身がわななく。

すべてが限界に達した瞬間、極大のアクメが訪れた。

——つどぶ♥ びゅぐぐ♥ ドブブ、ビュピ、ドププウウウウウウ〜ツ♥



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【偶数月】  
隔月発売  
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】  
隔月発売  
1-3-5-7-9-11月

【電子版】  
毎月配信  
書籍版は奇数月  
発売!



二次元  
**ドリーム  
マガジン**  
2D DREAM MAGAZINE

UN COMIC  
**アンソリアル**

**敗北乙女  
エクスタシー**  
Digital Content Distribution

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌  
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も  
好評発売中!

KTC 編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

最新情報は公式サイトへ! **キルタイムコミュニケーション**

検索

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3561-1208

# 二次元ドリームノベルズ

新ジャンル  
ライトノベル

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!

小説家になるこの男性向けサイト「アクトアインノベルズ」から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!



リアルドリーム文庫

## ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないオリジナル

フリーダム120%!? ジャンルにとわれないドキドキラブ!

ドキドキラブ

二次元ぷち文庫



二次元ドリーム文庫